幼兒の教育

昭和十一年十一月

十一月

秋を淋しいものに、悲しいものに思ふのは、老ゐたる人のことである。といふよりも、己が身のはかなさを秋の物情に托して、それをまた心に移し映して見るのは、老人のすることである。内なる秋を外の秋にかこつのである。

色づける木の葉。それはきれいな錦である。風に吹かれて散る木の葉。それはおもしろい舞ひの手である。柿の實は熟して紅くなり、栗の實も熟して殼を割る。秋の自然は、あかるさと成熟との力づよさでこそあれ、どこが何が、淋しくて悲しいのか。めき〳〵と肥え、潑溂として元氣充つる子どもにとつて、この位ゐ分らないことはない。

子どもに、秋を歌つて呉れる詩人よ。子どもに、秋を描いて呉れる畫家よ。先づ子どもの心になつて秋を喜ばなくてはならない。

（倉橋惣三）